

キリスト者の結婚と神の祝福

前回は、ギリシャの大都会コリントにある教会に起こっていた誤った禁欲主義について学んだ。当時のコリントの教会には、夫婦の交わりに関して信者になった夫または妻が結婚関係における性の交わりを汚らわしいものと思ひ、妻または夫との交わりを避けて自分の身を清く守ろうとする行き過ぎた信仰の潔癖主義に陥った人々がいた。

この傾向は、特に、未信者あるいは異教徒の配偶者を持つ信者の場合に深刻で、彼らは自分たちのキリスト者としての品性や霊的状态が異教徒または未信者との配偶者との交わりによって汚れるのではないか、そのような夫婦関係はキリストのからだとされた自分の霊性を汚すことになるのではないかと恐れ、それを避けようとしたのである。

それに対して使徒パウロは、未信者との結婚を「きよくない」としてそれを破棄しようとするこのような極端な潔癖主義の誤りを正すとともに、結婚が神の定められた恵みの秩序（制度）であり、たとい相手が未信者であったとしても、キリスト者のその結婚関係は決して汚れたものではなく、むしろ神の恵みの力、キリストのあがないを信じる者に与えられる神のきよめの祝福によって清められているのではないか、したがって、未信者の夫または妻を持つキリスト者は、その夫婦の交わり（結婚関係）を汚れたものとしていやがったり、結婚関係を解消しようとしてはいけない、むしろ、神の祝福を信じて安んじて共に住むように、と教えるのである（7：14）。

これは、聖なる神の前にきよく正しくありたいと熱心に望むがあまり、しかしその誤った潔白主義のゆえに、日常の夫婦関係の中で自分は罪を犯しているのではないだろうかと不安の中で生きている人々に対して与えられたパウロの慰めの言葉であり励ましの言葉であった。

キリスト者（特に未信者の配偶者を待つ信徒）は、結婚という神の恵みの制度の中で、神の恵みが自分だけにとどまるものではなく、自分を通して未信者の夫または妻にも及んでいくという、この結婚の祝福（神の約束）を、感謝をもってもう一度しっかりとらえ直す必要がある。宗教改革者カルヴァンも、「一方の信仰が結婚をきよめるのにつくす力は、他方の不信仰が結婚を汚す力をはるかに圧倒する」と語り、結婚関係の中に働く神の恵みの力を強調している。

父祖アダムにおいて人間が罪に墮落して以来、結婚関係の中にも罪が入り込み、いろいろな問題を引き起こし、苦しみや悩みをもたらすものとなったことも事実であるが、それにも関わらず、依然としてそれは神の恩寵の制度である。たとい配偶者が未信者であっても、キリストにあって私たちがあがない、私たちが愛し給う神の恵みは、この私を通して「わたしの夫」「わたしの妻」「わたしの家族」にも及んでいるのである。

キリスト者はこの恵みの事実をしっかりと覚えたいと思う。そして神の恵みの約束にしっかりと立って、確信と希望をもって自分のためにも、まだ救われていない配偶者のためにも、また家族のためにも、熱心に祈り、愛と忍耐をもってひたすら信仰に励み、また熱心に主に仕えて行く決心を日々あらたにしたいと思う。詩編の作者も言うように『そのしもべらの幸福を喜ばれる主は大いなるかな！』（詩篇35：27／口語訳）